75

長崎における牛痘種痘法接種者第一号である楢林建三郎の翻訳本

佐藤　利英，樋口　輝雄
日本歯科大学 医の博物館

日本に初めて牛痘による継続的な種痘法を伝えたのは，オランダ商館医のドイツ人医師Otto G.J. Mohnikeである．1796年にはイギリス人医師のE. Jennerによって牛痘接種法が発明され，まもなく世界各国に広まった．日本では牛痘苗を何度取り寄せても海上でだめになり種痘が成功しなかったが，佐賀藩主鍋島直正（閑叟）はオランダ商館長に牛痘苗の取り寄せを依頼した．その求めに応じ嘉永元年（1848）6月長崎へ来崎したMohnikeは，海外から牛痘液を持ってきたが失敗．そこで長崎在住の佐賀藩医であった楢林宗建がMohnikeに進言し，再度バタヴィアから痘痂を取り寄せた．そして嘉永2年（1849）6月に，宗建は3名の幼児を伴ない商館を訪れ，Mohnikeに接種を依頼した．右腕に新しい痘痂を接種し，宗建の三男建三郎が善感したため，この痘苗は日本の各地へ受け継がれ普及に繋がっていった．また8月には鍋島直正の嫡男・淳一郎（後の藩主直大）が大石良英から接種をうけることになる．

楢林家はオランダ通詞，医家としては鎮山を初代とする．鎮山は「紅夷外科宗伝」などを著し，創始した楢林流外科は，量右衛門の弟栄久が相続，以後，別家は数代にわたって外科医を開業した．また鎮山のオランダ通詞職は，子の量右衛門が相続後，楢林家は累代にわたってオランダ通詞を勤め，幕末維新に及んだ．

牛痘接種を受けた発痘児楢林建三郎の生年月には諸説があるが，大正7年（1918）の『大正人名辞典第四版』には，「楢林建三郎，正七位勲七等，君は……嘉永二年四月五日を以て長崎に生る．嘉永五年厳君病没せしを以て伯父楢林栄建君に養育せらる，劉石秋，劉三朗，何禮之等に師侍して英漢学を学び，明治二年大阪洋学校の設立せらるゝや教師に聘せらる，十一年辞して東京に来り山林局に出仕し，十五年皇居御造営事務局長に転じ，二十五年閉鎖せれるに及び非職となりしが，翌年宮内省に勤務する事となり累進して式部官に任ぜられ，三十八年辞して華族会館書記長となり久しくその任に在りき，君英文を好くし，著書多し……」と記している．嘉永2年4月5日は，西暦では1849年4月25日になる．

また，昭和15年（1940）3月31日の朝日新聞は，楢林建三郎と鍋島直大に関する記事を掲載した．「……帝都に蔓延する恐るべき天然痘渦と，これに対し必死の防疫陣を張る医術部隊の目醒ましい活躍振りを誰よりも一倍深い関心を以て見護つている二人の老婦人がある．その一人は我が国牛痘の嚆矢といわれる故楢林建三郎氏未亡人満由刀自，八六，今一人は旧佐賀藩主鍋島直大侯の未亡人栄子刀自八六，……楢林宗建翁は牛痘苗がオランダ本国から届いたのを知るや直ちに同氏の三男，満由刀自の夫建三郎氏が生後四か月で未だ天然痘に感じていないのを幸いにモーニッケ氏のもとに連れて行って種痘をして貰つた．……その後暫くして善感したので，この種痘術習得の喜びを藩主閑叟侯に報告すると，進歩的な侯はまずその当時五歳であつた令息直大侯（元式部長官）に建三郎氏の痘苗を接種して側近者や一般の家来に範を示し……」と写真入りの紙面で日本の牛痘法種痘の歴史に名を残した二人を紹介した．

長崎オランダ通詞の裔孫でもある建三郎は幕末から英語を修得し，1888年に英文書簡作成の実用書「英文尺牘活法」を上梓した．明治38（1905）年に宮内省の式部属兼舎人から式部官に任じられ，華族会館書記長などを務めた．建三郎はイギリス人医師George H. Hopeが1870年にロンドンで刊行した家庭医学書“Till The Doctor Comes : And How to Help Him”の増補版で，1871年にニューヨークのG.P. Putnam社からPutnam’s Handy book Seriesの1冊として出版された本を底本として和訳し，『医師の来る迄　一名救急方』の書名で明治7年（1874）に大成館から和綴じ整版本を上中下の3巻で刊行している．

今回は楢林建三郎の著訳書の書誌と和訳本について報告する．